

魑魅魍魎の闇を切り開く

—古典の継承と再生—

京都市外の北西、修学旅行で有名な二条城の北の、堀川通を西に少し入ったところに晴明神社がある。至る所に霊界との通路が口を開き、魑魅魍魎が跋扈していた平安京の、その影の支配者ともいわれたスーパーヒーロー、最高にして最強の陰陽師、安倍晴明を祀る神社である。そもそもは、晴明の邸宅跡ともいわれ、近くには一条戻橋がある。晴明はその橋の下に、呪術に使うための式神を隠していたというのである。

安倍晴明は、夢枕獏氏原作のコミックス『陰陽師』によって、数年前に大ブレイクした。さらに第一部、第二部と映画化され、野村流狂言師の若きエース野村萬斎氏が晴明を演じて話題となった。なかなか色気がある、しかしどこか胡散臭さも漂う晴明役がはまっていて、かなり楽しめた。伊藤英明氏の源博雅も好感が持てた。

もちろん現代風にエンタテインメント化されたストーリーには、かなりの脚色が入っていた。古代史に登場する人物や事件の因果関係は、やはりそこは大胆な作り物の世界である。ただ、その端々にはあるが、晴明にまつわる古典説話に描かれたエピソードが、小道具として登場することに、たいへん興味を覚えた。

例えば、当時の政権の中心人物である藤原道長の暗殺を企てた者が、道長に瓜を献上するが、晴明はその中に密かに隠された蛇を見つけ出し命を救った話とか、広沢の池の

蛙を草の葉を投げて呪殺した話とかが、陰陽師としての晴明の能力の高さを語る場面に出てくるのである。

『明解古典講読 日本の説話』に収載されている晴明説話は、「呪いを知らせた犬」である。道長が法成寺の門を入ろうとしたとき、かわいがっていた白い犬が袖をくわえて異常に吠え立てる。道長が晴明に占わせると地中から呪いをかけた土器が発見されたという話である。

犯人探索のために、晴明が紙を鳥の形に折って投げ上げると、たちまち白鷺になって飛んでいき、呪詛の張本人である芦屋道満のもとへと落ちるのだが、この「紙を鳥の形に折って投げ上げ鳥に変身させる」というモチーフも、

しつかりと映画の中に使われている。

コミックスや映画は現代の作り物であり、古典文学とは無縁であるといってしまうまでもである。しかし、このような、古典を読んでいればこそその楽しみ方もたしかにあるのである。(伊坂)

